

未評価出土文化財をめぐる 博物館資料学の実践研究(2)

— 縄文文化解体期の南四国域における粗製深鉢群の再検証 (中篇) —

幸 泉 満 夫

はじめに

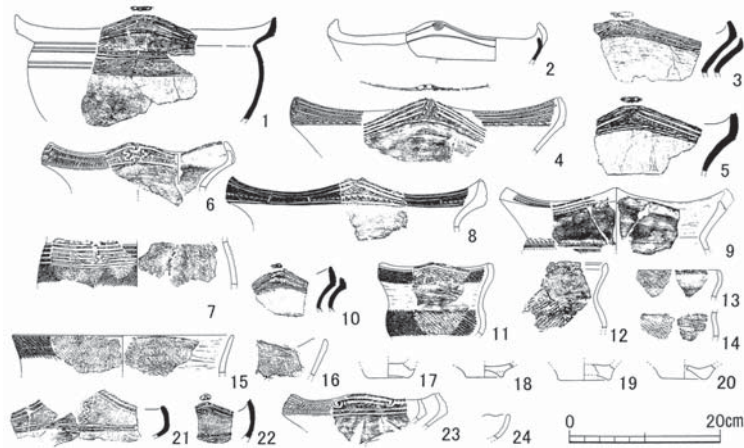
本稿は、本誌第45号より連載中の「未評価出土文化財をめぐる博物館資料学の実践研究」のシリーズ第二弾、「縄文文化解体期の南四国域における粗製深鉢群の再検証」の中篇である。紙幅制限の都合、今回は、縄文時代後期中葉の Stage13より論述を再開し、Stage26~27、中村Ⅱ式新相~入田B式古相(夜臼Ⅱa式併行期)までを対象とする。

5. 南四国域の検証 (中篇) — Stage13~27 —

(7) 西南四国域X圏における後期中葉3 ; Stage13古相の様相

第12図は Stage13の古相、広義の西平式併行期の例である。当該期に相当する比較的良好な事例としては、四万十市(旧西土佐村)大宮・宮崎遺跡(木村編1999)、宿毛市宿毛貝塚 TR3(山本・廣田編1986)、高知市柳田遺跡(森田編1994)、四万十町(旧十和村)広瀬遺跡(岡本1963)等が挙げられる。加えて、四万十市船戸遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土資料(松田編1996)のうち片粕式、広瀬上層式に次ぐ西平式併行期の古相の一群も、型式学的見地から分別が可能であろう。ただし、何れも厳密な意味での一括性には乏しい。

Stage13古相の深鉢・鉢は第12図1~10に示されるように、広義の磨消縄文系精製深鉢・鉢が大多数を占める。うち、深鉢は前段の平縁主体から一転、強い波状口縁を呈するようになる。口縁部を「く」字状に内傾、頸部外反ののち、胴部上半に特徴的な球形の強い弯曲を伴ってくるのである(第12図1・3・7・9)。波頂部直上に付される矮小化した刺突の存在については、既に、木村等も一部指摘するところであるが(木村1987, p671)、前段の Stage12新相(3)、片粕式~広瀬上層式の間で把握できる



第12図 西南四国域における Stage13古の様相
 (1～3・5・10・21・22四万十市船戸1993年度区古相、4・6・7・9・11・13～15・23
 四万十市大宮・宮崎、8・12・16～20・24宿毛市宿毛貝塚出土)

型式学的連続性を鑑みれば、第12図1・3～5は、さらに退嬰化の進んだ「W字状貼付文」の成れの果てとして、理解するのが妥当であろう。無論、これまで西平式や伊吹町式の定義として指摘されてきた波頂部のV字刻（富田1987ほか、犬飼1993ほか）はより新相とみるべきであり、同型式のさらなる細別を予察させるであろう。

同群は学史上、九州地方の西平・太郎迫式と深い類縁性を有した土器と認識されて久しい。けれども当該地域の場合、より通史的に理解しようとするならば、前段を継承して口縁部と胴部上半に横位基調の縄文地沈線文帯が幅狭に設けられること、すなわち、原則磨消縄文系の再発達をみない点で、九州側とは施文手法の根本が異なる。また、愛媛大学の西田栄により「伊吹町式」と命名された論拠の一つとされる口縁部における三条沈線基調の横走沈線帯（西田1961）と、前段の Stage12後半で沈線間に付されていた、いわゆる「穀粒状」（木村2002ほか）等と表現されてきた大振りの押し刺突、ならびに列点文多用の傾向を継承した、連続する斜行刻目帯の存在も、判別の際の指標として挙げられよう。さらに指摘のある通り、胴部上半における四～七条から成る平行線文と波状文帯の組合せ意匠の存在を加味したうえで、これらを西南四国域の在地色として捉えるべきであろうが（木村2002, p8ほか⁵⁾、一方で近年、該期資料が増加する東南九州側でも、類縁した土器が少なからず散見できるようになったことから、別途、それらの広域的な整理と位置付けが課題となるだろう。

このほか第12図2や22の波頂部外面で目に付く渦巻文については、より広域的に見

れば、一乗寺 K 式等の標徴とされる「6」字状文の変異意匠であることが自明であろう。これらについても先の Stage12 新相段階からの連続性を指摘できるからである。同様の観点から、該期型式の胴部文様帯を中心に散見される「U」字、「ㄩ」字、「C」字状等の各種アクセント意匠（第12図7等）は、この「6」字状文の変異型と理解できることから、第12図2・22は Stage13 古相に位置付けられよう。またこれに準ずる意匠の一群もまた、概ね、同等の編年観を与えることが可能となるはずである。

第12図11～14は、口胴縄文系とその変異タイプである。数は少ない。Stage12 新相③期段階と大差ないが、前段を継承しつつ、口縁部を直立気味に短く内弯成形させる個体が多くなる。頸胴部の屈曲は甘く、境界域に界線を加える例は少ないとみられる。うち11は凹線の上縁をナデ消す手法を採る点で、Stage13 新相にまで下る可能性があるだろう。ただこれらの縄文原体は、未だ単節のしっかりとした RL、ないしは LR 縄文を用いている。第12図11の例から、以上が、瀬戸内側の彦崎 K 2 式古段階との併行関係を備えている可能性が高いと本稿では捉えておきたい。

伴出の無文系は極めて少ない。僅かに、鉢形を呈する第12図16の存在が知られる程度である。器面調整は丁寧で、口縁は直線的な緩三角形を呈している。すなわち、16は広義の磨消縄文系鉢に準じた精製器種と見做すべきであろう。このように X 圏、西南四国域では外来系を除いて無文粗製の深鉢は皆無、ないしは、それに極めて近い状態であったと理解できるのである。

成形法は、全器種とも内傾接合を継承している。ただし深鉢・鉢底部に関しては、変化の兆しも窺える。それは中央内面を凸状に強く盛り上げる、特徴的な製作技法に象徴されよう（第12図19・20）。従来より「極端な揚げ底」（犬飼1993, p16）、「深く上がる底部」（木村1995, p682）等と称されてきたもので、のち筆者が「ワインボトル状底」という固有名詞も付与している（幸泉2002・2009c ほか）。うち、西南四国域で接地面を残す例が多いのは、前段の技法を継承する証であるとともに、豊後水道を介した、東南九州側との非視覚的な属性レベルでの交渉の継続を物語るものといえよう（第12図18・20）。

伴出の精製浅鉢については、周辺諸圏と比べて些か組成率が低い可能性もたれる。第12図21～24はその具体事例である。緩く内弯する、深鉢の口縁部成形に似た器形をベースに縄文地沈線文意匠を幅広く展開させ、文様帯下端部付近で強く屈曲させたボウル形が、この時期の主勢を成している。

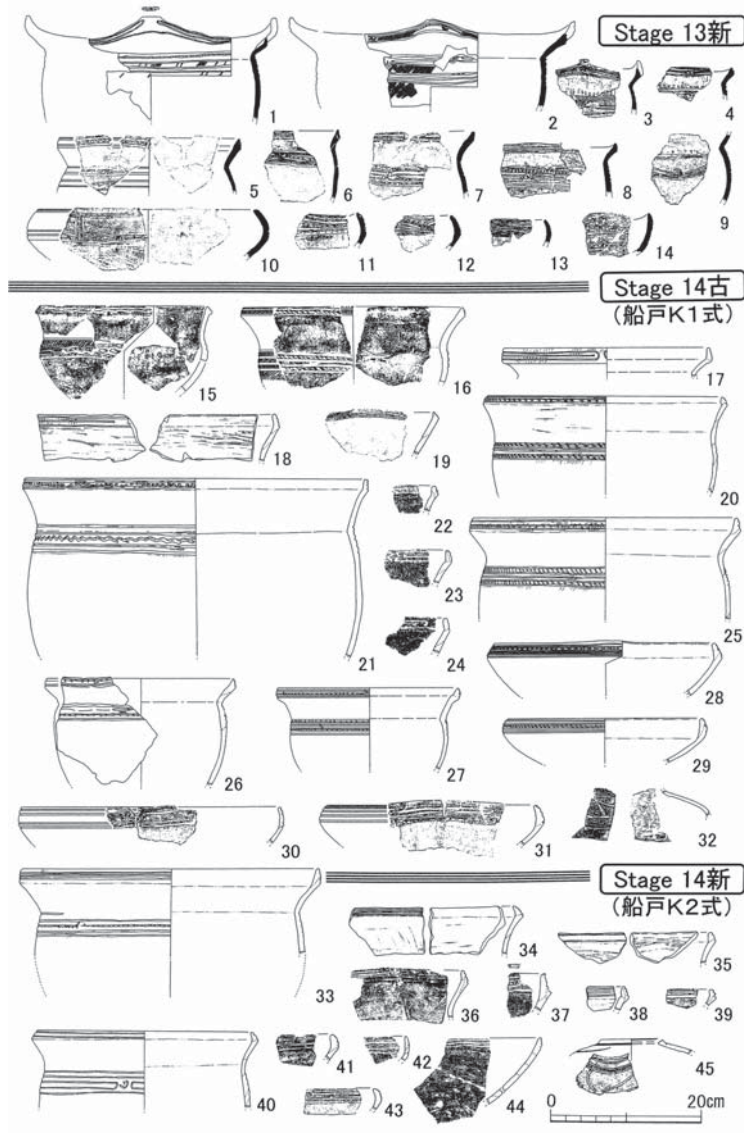
(8) 西南四国域X圏における後期中葉4；Stage13新相～14の様相

—船戸K式の提唱—

つづく第13図は、2010年以降、筆者が「伊吹町式よりも新しい」と指摘してきた、広く元住吉山I式新相に併行する一群である（幸泉2010, p102-103）。従来、南四国域で型式未命名の段階だったともいえよう。かつて水ノ江和同が整理した北部九州の西平II式～太郎迫式（水ノ江1992）、また岡田憲一のいう近畿地方周辺の「元住吉山I式2期」（岡田1998, p158）とは、概ね併行関係にあると考えられる⁶⁾。当該期の事例としては、現状で四万十市船戸遺跡I・II区（松田編1996）が比較的充実しているが、他にも四万十市（旧西土佐村）大宮・宮崎遺跡A-1～3区中相や同B-2・B-3区新相（木村編1999）、宿毛市宿毛貝塚TR3（山本・廣田編1986、木村1995ほか）、土佐清水市片粕遺跡（岡本ほか編1975）等で各々一定量が散見できる。一括事例に乏しい点は今後の課題となろう⁷⁾。

第13図上段は、型式学的観点から伊吹町式の後半（概ね水ノ江1992の西平II式併行）、Stage13新相と捉えられる一群を纏めたものである。前段の第12図、Stage13古相の諸例とを比較すれば、有文精製深鉢・鉢では口縁、胴部文様帯の萎縮化や波頂部の振幅の相対的な低平化に加え、四～六条ほどの平行線を基調としはじめることが判るだろう。九州地方のような連弧文意匠は稀である（第13図9）。斜行刻目帯、ないし刺突列の多様化が認められる（第13図1～10）。主文には一～二連の「U」字状や鍵手状のアクセント文が窺われる。これも九州側とは異なるエレメントである（第13図2・4・6～9）。また、精製浅鉢においても緩波状化とともに口縁部文様帯が萎縮化する。そこに描かれる文様自身、幾何学意匠が崩壊し、横位基調に向けた再編の兆しと、深鉢からの影響のもとに、沈線内刺突から独立を果たした刻目帯の発達を把握できるだろう（第13図12～16）。さらに精製全器種において、縄文施文の不明瞭化が指摘できるようになる（第13図1・4・5ほか）。

つづく第13図中段はStage14古相、型式学的にみて、九州の太郎迫式古相との併行関係が想定される一群である。船戸遺跡のI区で比較的多く出土している。以下、「船戸K1式」と仮称したい。全器種で平縁化が進むとともに、口縁で二～三条、胴部では幅狭化した三～五条の平行沈線が基調となる。各沈線間には擬似的な縄文表現を意図して、Stage13段階より継承されてきた右斜下方向を志向する斜位の刻目帯や波状文等が、より積極的に用いられるようになる（第13図24～31）。アクセント文は第13図27の口縁、胴部各文様帯に対向弧線文の退化型とみられる「ハ」字状文が窺える程度であり、一時的に減少する可能性も考えられる。精製浅鉢も基本的な施文パターンは深鉢と同様であり、多重沈線と斜行刻目、刺突、波状文で構成される。さらに文様構成との相関関係から口縁部が萎縮化するとともに、緩逆「く」字形を呈する



第13図 西南四国域における Stage13新~14の様相
 (15・16四万十市大宮・宮崎、その他は四万十市船戸1993年度区出土中~新相)



写真10 Stage14新相 船戸 K2式標式土器
(四万十市船戸遺跡出土 / 高知県埋文蔵 / 筆者撮影)

個体が当該期に主勢化するとみられる。縄文施文は全器種で一層稀薄化し、部分的に、淡く不明瞭に施される例（第13図24・26・31）や、無節縄文 Lr を限定的に押捺する例（第13図25）、全く無文とする例（第13図23・27・30）の三者で構成されるようになる。

第13図下段は型式学的見地からさらに新しく、Stage14新相、すなわち Stage15の凹線文成立期との端境期に位置すると考えられる一群である。船戸遺跡のⅡ区等で比較的多く出土しているが、現状では纏まった短期間形成資料群には恵まれない。以下、「船戸 K2式」と仮称したい。第13図33は、前段の船戸 K1式との過渡期を示す深鉢形土器である。口縁、胴部ともに一層の横走沈線化が進む。また沈線間における刺突や刻目、波状文といった意匠は消滅に向かいつつ、胴部文様帯の二段目に、微弱で痕跡的な連続刺突が一行、かろうじて残されるのみである。図の、向かって右半分では沈線内に刺突されるのに対して、退化型主文たる「ハ」字状刺突の左側からは、二段目沈線の下縁から外部に逸脱して、斜行刻目文として描かれ直している。すなわち、沈線内刺突や刻目帯といった従来の規制が失われた末期的態様と理解できるのである。さらに興味深いのは、縄文施文が口縁、胴部とも最終器面調整において掻き消されている様である。そうした行為の意図そのものは解し難いものの、もはや、縄文施文が意味を成していなかったことだけは明らかであり、縄文施文の終焉を告げる姿として捉えてよいだろう。深鉢は平縁を維持するとともに、端部を二等辺三角形様に摘み出す古相のタイプ（第13図34等）から、逆「く」字状にやや伸長させ、その端部を平坦化させるタイプが新たに派生したと推認される（第13図36→35・39・40）。これは、前段の浅鉢における口縁部形状の変化に追随したものであり、続く Stage15に向けて主勢化してくる可能性が指摘できよう。口縁、胴部は多条沈線を維持し、うち口縁では、九州北半の太郎迫式に通じた二条の例と、在地周縁に特有の四条を基調とする例が、また張りを失った胴部上半にも、概ね五条前後の横走多条沈線が施文される傾向にある。加えて、前段で特徴を成した斜行刻目や刺突、波状沈線文等が、当該期では認められなくなるのである。うち第13図33・40のように胴部の平行沈線帯上に「x」字状文や「ハ」字状文等のアクセント的な短沈線を付す手法は、広義の太郎迫式との年代交差を試みるうえでも重要な役割を果たすものである（写真10左）。また既に無文の多重平行線を基調

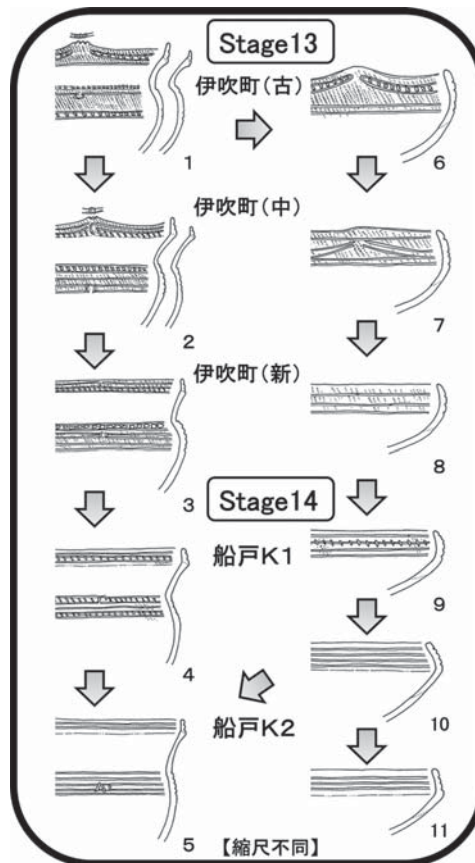
としていることから、太郎迫式新段階との併行関係を導出し得るだろう（富田1987、綿貫1991、水ノ江1992・2010ほか）。なお精製浅鉢は、縄文施文を失ったことで口縁部文様帯が一層洗練され、逆「く」字形を呈するようになる。口縁上には、二～四条の横走沈線を描くのみとなる（第13図41～43、第14図9→10→11；写真10）。

以上、伊吹町式～船戸K式までの標式資料群の検討をもとに、その編年の指標となる有文精製深鉢、および浅鉢の変遷を模式図として纏めたのが、第14図である。

これらは、いわゆる Stage13の伊吹町式段階より口縁部波頂部の低平化から平縁への移行、文様帯の上下萎縮と横走沈線化、ならびに縄文施文の稀薄、消滅化といった一連の流れのなかで説明が付こう（第14図上三段）。さらに連動して、器形もまた頸胴部間の屈曲が弱まり、弛緩化するといった一連の傾向を読み取れる。このうち、Stage13の縄文原体

については、単節 RL 縄文をその新相段階まで主体的に維持する傾向が窺われよう。西南四国域における小地域差の一つである。

さらに縄文が消失、ないしは痕跡化することで Stage14古相の船戸 K 1 式へと連続的に推移する。同段階では深鉢、浅鉢ともに斜行刻目帯の存在が視覚レベルでの最大の特徴を成している。この刻目意匠は、該期に至っては縄文の擬似的表現であることがほぼ自明であると同時に、彦崎 K 2 式新段階や元住吉山 I 式新段階、太郎迫式新段階、あるいは東南九州の中岳 I 式等、広く西日本全域において共通する意匠表現として、特筆に値しよう。もっとも瀬戸内側のような貝殻擬縄文への置換は認められない。Stage12新相以来の列点文から転化した斜行刻目帯が、そのまま、擬似縄文とし



第14図 西南四国X圏における Stage13新～Stage14の有文土器の変遷（模式図）

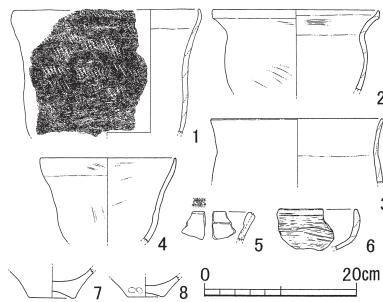
て新たな意味を付与されるのである。さらに、縄文を失った多重横走沈線帯と組み合わせることで、船戸 K1 式的意匠が独自に成立、盛行したとみるべきであろう。その後、浅鉢ではいち早く刻目帯が失われる。またこれと連動して、口縁部形態が強内弯形から逆「く」字形へと変容するのである（第14図9→10→11）。

Stage14新相の船戸 K2 式段階については、現状で良好な資料群に恵まれておらず、筆者も、型式学的推論の段階に留まるとみている。第14図5に示す通り、大筋としては深鉢も刻目帯を捨て、横走沈線のみになる段階を想定している。器形については、口縁が短く立ち上がり口唇を平坦に仕上げる点や、頸胴部の張りが弱まる点において、後続の凹線文初期に近い特徴が備わっているとみてよいだろう。

従来、凹線文成立前夜の九州周辺は前型式とのヒアタスが大きいと見做され、関西以東からの元住吉山式系統の影響が指摘されがちであった（岡田・深井1998、岡田2008ほか）。しかしながら、こうした船戸 K 式土器群の存在を理解することで、三万

田式との較差はこれまでの認識以上に縮まるものとみることが可能となる。そもそも、後続の Stage15 成立を象徴する「凹線文」なる統一意匠は、後述するように、その前夜における Stage14 段階で既に僅かながらも、口縁端部内縁や頸胴部の界線意匠の表現手段として試行されつつあった。この Stage14 段階については、本シリーズで扱う南四国のみならず、より広域的な視座からの再整理を急ぐ必要がある。

以上の精製有文土器以外の、粗製土器群に対する詳細時期区分もまた、今後の課題とせざるを得ないだろう。ここでは Stage13 新相～14 段階の粗製土器群として、第15図に一括して纏めてみた。なかでも、東日本に由来する全縄文深鉢が引き続き、極少量ながらも存続する点は看過できないだろう（第15図1）。原体は、縄文消失の反動だろうか、条幅約 2mm と、逆に粗い原体



第15図 X 圏における Stage13 新～14 の全縄文・無文系土器
(四万十市船戸1993区出土 / 高知県蔵)

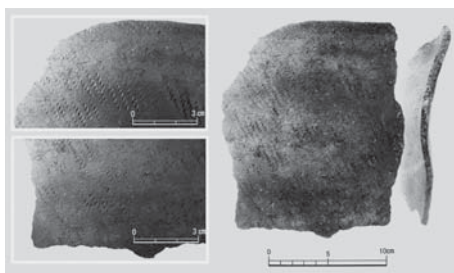


写真11 Stage13 新～14 の全縄文深鉢
(四万十市船戸遺跡出土 / 高知県埋文蔵 / 筆者撮影 / 第15図1)

を用いている。併行期の北陸地方でも認め得る傾向である（幸泉2009a・2020c）。もっとも、その施文手法は全縄文深鉢が隆盛する北陸西部の諸例とは多少異なっていて、押し並べて不鮮明である（写真11）。またその器形についても、在来深鉢の影響が色濃く反映された屈曲～緩屈曲形を援用していることから、東方からの直接的な遠距離搬入土器と見做すべきではないだろう⁸⁾。

無文系深鉢もまた、極少量に過ぎない。有文模倣形の第15図2と、素口縁屈曲形の3が窺える程度である。4は鉢形で、有文との中間形であろう。うち2・3の器面には丁寧なナデ調整が加えられることから、ここで粗製と呼べるものは4の鉢のみとなる。すなわち、併行期で隣接する西部瀬戸内や北部九州沿岸域で既に普遍的といえた無文系粗製深鉢は、やはり、南四国域ではまだ極めて稀有な状況が続いていたことになるのである。こうした製作技法上の特性は、有文・無文といった視覚的区分に留まるものではなく、実は精・粗製の製作理念そのものに深く浸透していたと理解することができよう。

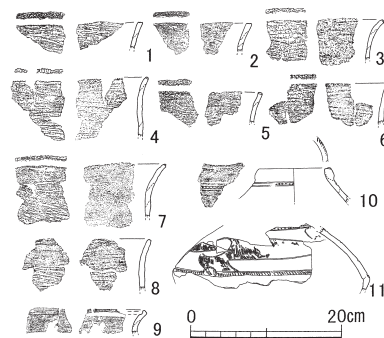
なお Stage13新相～ Stage14段階の成形法については、全器種ともに内傾接合が維持されている。粗製主体の北部九州沿岸域周縁で盛行していた有機物混和の風習（幸泉2017）もまだ窺えない。深鉢・鉢底部については、前段のワインボトル状底が減退し、周辺他地域と同様、次第に単純な小型凹底、加えて中九州を中心とする小型高台凹底の二者へと収斂されていく（第15図7・8）。以上の製作基盤の背景としては、西方の東南九州～中九州域とを結ぶ一帯、仮称「中九州・豊後水道ベルト地帯」が潜在するものと筆者はみている。

(9) 南四国中央域区圏における

後期中葉4；Stage14の様相

南四国中央域区圏側では一層、実態が不明瞭となる。ここでは第16図として、高知市柳田遺跡ⅢJ区B層出土資料（森田ほか編1994）を掲げるのみとした。

第16図1・2は、口唇上に貝殻擬似縄文を施した、口胴縄文系統の深鉢片である。既に縁帯状の外周肥厚は完全に失われ、素口縁化している例であるが、同層資料群では古相を占める。主勢を成すのは、つづく第16図3～6に示した、口唇上に細やかな連続刻目を付す一群である。分類上は無



第16図 南四国中央区圏における Stage14の様相
(2～5・7・9～11：高知市柳田遺跡ⅢJ区B層、1・6・8；同Ⅲ区北端包含層出土)

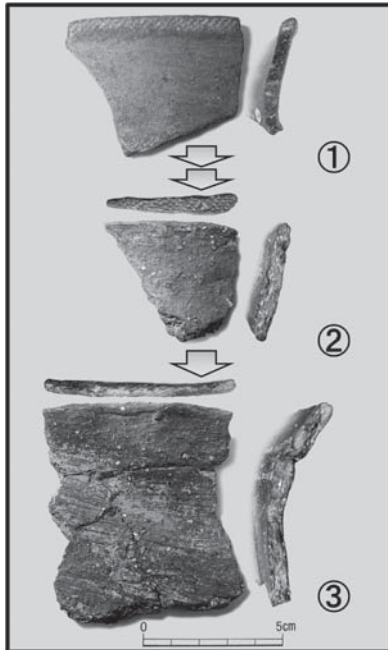


写真12 区圈 口胴縄文系の解体過程
 (①高知市西分増井、②・③高知市柳田出土 / 高知市教委蔵 / 筆者撮影)

文系 K 類型深鉢に包括されるが、明らかに、上記 1・2 でみた擬縄文を一層退嬰化させた擬似的施文法の延長上として理解すべきだろう。後者は Stage14 新相、彦崎 K 2 式新段階併行に帰属しよう (写真12下段)。伴出の注口土器 2 点は同一個体で、刻目刺突と巻貝擬縄文から成る (第16図10・11)。関西周辺の元住吉山 I 式新相段階との併行関係を示唆する例である。

以上、柳田遺跡Ⅲ J 区 B 層資料群は広域編年の立場から、前段で述べた X 圏、西南四国域の船戸 K 1・K 2 式との併行関係が概ね想定できる。しかしながら隣接する両地域の特徴は、著しく異なる。高知平野側の柳田遺跡にみる土器構成は瀬戸内側と通じており、口縁の屈曲する元住吉山Ⅱ式や三万田式等、凹線文系の祖型と見做し得るエレメントには乏しいのである。以上は、IX 圏を含む瀬戸内側では後続の Stage15 段階においても口縁屈曲型の凹線文系深鉢が存在せず、口胴縄文系

の変異型と見做される口縁非屈曲型深鉢のみで構成されるとする豊島雪絵等の見解とも概ね合致しよう (豊島2010)⁹⁾。

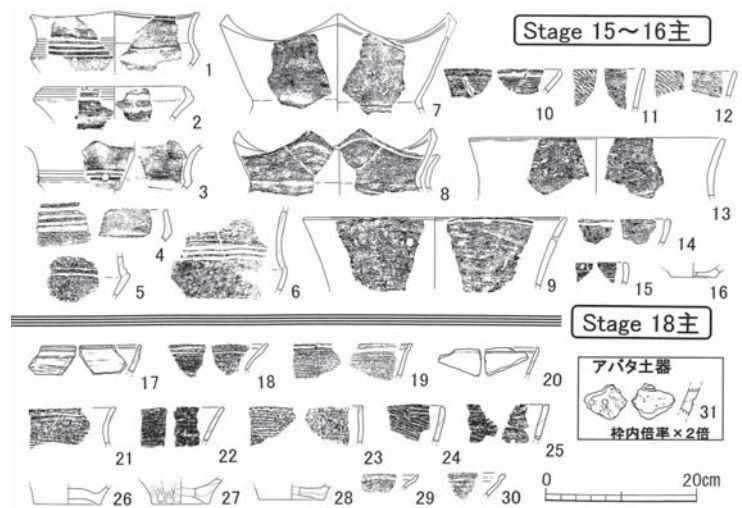
9 は内沈線文系深鉢の口縁部片である。ただし内縁に横走する描線は幅 4～5 mm の凹線である。他の伴出資料群との同時性は厳格には担保し得ないものの、当該地点では Stage15 段階以降の土器片が一点も出土していないこと等を思料するならば、Stage14 段階に収まる可能性を否定できないだろう。現に Stage14 段階における凹線の使用は、学界周知の兵庫県佃遺跡における折衷事例 (岡田・深井1998, p148-149) 以外にも、西中国側では島根県津和野町大蔭遺跡 1 区 SI 2 (宮田編2010) 等が、また山陽エリアでも玉野市出崎船越遺跡の浅鉢形土器 (平井・保田1987) 等で極少量ながら存在が知られている。紙幅の都合ここで詳述はしないが、西南四国域でも Stage14 の新相段階に凹線が萌芽的に出現していた可能性を残しておくべきであろう。

伴出の無文系深鉢としては第16図7・8が挙げられる。その組成比等、不明な点ばかりであるが、器形は上記の素文 (= 口胴縄文系末裔) 深鉢と同等であり、器面には巻貝条痕が明瞭に残されている。これらも、瀬戸内側と同等の傾向といえるだろう。

(10) 後期後葉；Stage15～18の様相

第17図では Stage15～18、いわゆる凹線文期の様相を広く掲げた。当該期の良好な事例は極めて少ない。比較的纏まった事例として、古相ではX圏の四万十市（旧西土佐村）大宮・宮崎遺跡 A-0 区と A-3 区の新相（木村編1999、犬飼2011）、また新相段階でもⅨ圏とX圏の交錯地帯に位置する津野町（旧葉山村）の姫野々上町遺跡例（山本編1984）が挙げられる程度である。

X圏古相の Stage15～16では、三万田式や福田 K3 式、馬取式に通ずる凹線文系深鉢・浅鉢の器種組成上の割合が極めて少ない可能性もたれる（第17図上段）。そして、代わって特徴的なのが第17図7・8・10の存在である。いわゆる東南九州側で周知される内沈（凹）線文系の、駒方 C 式と通ずる土器であり、豊後水道を介した交流関係の継承が、その基盤にあるとみるべきであろう。器形、特徴から前段の太郎迫式新相の特徴を色濃く継承していることもまた自明である。広義の凹線文系については、広域分布を成す精製の内折浅鉢（第17図1～3）のみが明確な形でセット関係を成し、深鉢については、前段の古い流儀を継承する器形が初期の主体を占めていたと想定されるのである。因みにこうした駒方 C 式系の深鉢は、図上でみれば極めて素文であるが、その器表面はミガキ調整により、驚くほど丁寧に仕上げられている。つ



第17図 南四国域における Stage15～18の断片的様相
 (1～3 四万十市大宮・宮崎 A-3～A-5 区、4 南国市栄工田、7～16 大宮・宮崎 A-0 区、5・6・17～31 津野町姫野々上町出土)

まり、古い伝統たる精製器種としての深鉢製作を維持しようとした結果が、上記のようなセット関係を成立させたのである。その組成率上の普遍性からも、これら素文深鉢群が、かつて坪井清足が提起したような特別な場で使用された祭器等ではなく（坪井1965ほか）、あくまで、日用什器としての使用が想定される点でも興味深いといえるだろう。

上記傾向から、Stage15～16頃の粗製深鉢については依然、その数量が極めて少なかったとみられる。第17図11・12は全縄文、13は無文系深鉢の事例である。何れも口唇部を刻む個体はない。しかもその器形は、駒方C式の内沈線文系深鉢に準じて頸部を屈曲、口縁は直線的に外傾させる例を原則とした模倣形である。後者の全縄文類型に関してもまた、併行期の北陸地方で一般的な砲弾形を成す個体は認められない。あくまで、Stage12から継承される在地器種の一派を前提に、理解すべきなのである。

第17図下段は凹線文期の後半、姫野々上町遺跡出土の、Stage18を主体とする一群である。前段における精製中心のセット関係から一転、ここでは、深鉢のほぼ全てが二枚貝条痕を明瞭に残す粗製土器へと変容しており、注目に値しよう。外反化が進む口縁部外面の文様帯には一～二条の、また内縁にも細線ないしは太沈線一条を加える個体が多い（第17図17・18・20）。頸部下縁（頸胴部界域）にも、二～三条のミガキ凹線が施されている。以上の特徴は、東南四国ないしは中～東部瀬戸内側からのある程度の影響を物語るものであろう。少なくとも、西部瀬戸内側を中心に分布する岩田第三～四類系土器群や、東南九州の中岳系統からの直接的影響が、原則認められないからである。無文系統とのセット関係については未だ不明瞭であるが、二枚貝条痕が明瞭に残される21～25については、上記有文深鉢群とも製作技法や色調が類似して

り、共伴関係を成していた可能性を考えておきたい。なお、これまで長期の存続が把握できていた全縄文深鉢が、この時期以降、認められなくなる。遅くとも、後期末までには消滅したと捉えてよいだろう。

以上のように、Stage18前後に突如として表面化した深鉢の粗製化に至るプロセスもまた、今後の広域的な研究課題となり得るだろう。また、豊後水道を介した中九州・豊後水道ベルト地帯と深い関



写真13 後期末前後のアバタ土器片
（姫野々上町遺跡出土 / 津野町郷土資料館蔵 / 筆者撮影）

係を有したⅩ圏に対して、Ⅸ圏の南四国中央域では、該期前後において東南四国ないしは中～東部瀬戸内側との交流を深めていた可能性が窺知できた。もっとも浅鉢の組成比が低い点に関しては、南四国全域で共通する可能性が高いであろう。さらなる資料蓄積を待ちつつ、将来的には別途、器種組成の変遷過程について検討を深める必要がある。

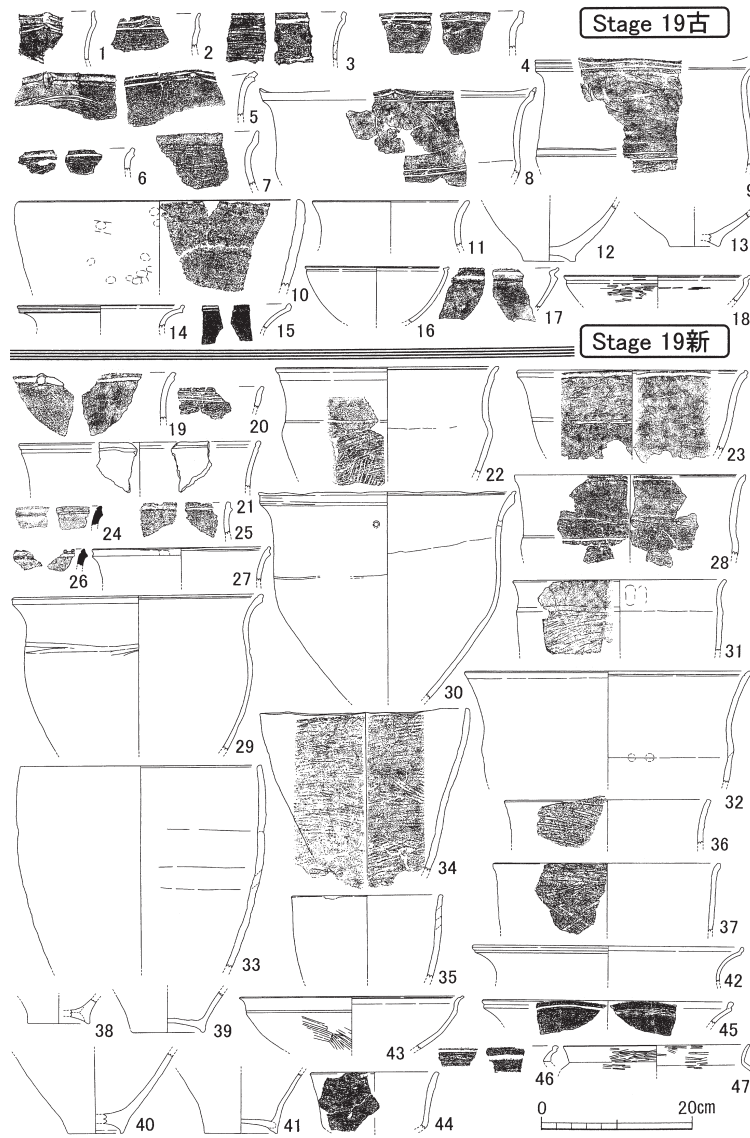
(11) 後期末～晩期初頭；南四国中央域Ⅸ圏における Stage19の様相

第18図上段は Stage19古相、東南九州における入佐Ⅰ式や古閑Ⅰ式古相等に併行する時期の様相である。当該期の良好な事例としては、土佐市上ノ村遺跡（出原編2011）、南国市栄エ田遺跡（松村編1995）、津野町（旧葉山村）姫野々上町遺跡第3層（山本編1984）等が挙げられる。ここでも厳密な意味での一括資料には恵まれていない。

第18図1・2は関西方面（東南四国域を含む）由来で、概ね滋賀里Ⅱ式の古相に併行する。3は西部瀬戸内由来で、口縁部内面における段状沈線および外面の稜の弱さから、岩田第四類系の中相に比定できよう（小南2000・2007ほか）。同じく Stage19前半に帰属する。該期で主勢を成すのは、第18図4・6・8・9に示す口縁部外面を強く屈折、直立させる深鉢群である。うち6・8・9のように口縁屈折の内面位置に沈線一条を補う手法は、東九州域では Stage15、三万田式期から窺われる。のちの中村Ⅱ式に顕在化する内文の存在を鑑みれば、先の姫野々上町遺跡第3層でみた滋賀里系内文とは、別のルーツが複合的に潜在するとみるべきであろう。頸胴部の屈曲は甘く、胴部中位が算盤胴形に張る。この胴部には二条の浅い細沈線が明瞭に施されており、東南～中九州域における中岳Ⅱ式後継の未命名型式や、坂口式の深鉢Ⅱ群（後藤1995）、古閑Ⅰ式等と変遷の方向性を共有していよう（下山1988、栗畑1989、堂込1997、吉本2010ほか）。ただしそれらの器面は、前段の傾向を引き継いで比較的粗いナデ、または二枚貝条痕後ナデであって、特に中九州側とは異なり、粗製化が著しい（写真14）。第18図5は口縁部外面に中岳Ⅱ式的な段状隆帯を貼付け、極めて緩やかな波頂部に「ユビ押し引き」による擬似凹点文を付す例である。一見、岩田第四類を彷彿とさせるのだが、その内



写真14 器面を丁寧に磨く中九州の古閑Ⅰ式深鉢
（権現塚北遺跡出土／福岡県みなべ町蔵／筆者撮影）



第18図 南四国中央域区画における Stage19の様相
(1～23・25・27～47土佐市上ノ村、24・26居徳3B区IVc層出土)

面には別途、滋賀里Ⅱ式的な二条沈線と凹点から成る内文がバイフェイスに加えられている。つまり、周縁各地の属性エレメントが一つに集約され、独自にブレンドされた折衷土器として評価すべき土器なのである(写真15)。

無文系深鉢そのものは、まだ比較的数が少ない。有文模倣型の7や、頸部を強く外反させる屈曲形の11に加え、外来系とみられる砲弾Ⅱ-③形(幸泉2017, p60参照)が少量伴っている。

深鉢底部については、接地面を有する径8cm前後の高台凹底が主となる。すなわち西南四国～東九州的な製作技法を維持している。

伴出の精製浅鉢は、第18図14・15の二段屈曲タイプと、16～18の口縁部を短く逆「く」字状に屈曲させるタイプの2種類がある。何れも、Stage19前後の汎西日本において通有のタイプである。

第18図下段はStage19新相、中岳Ⅱ式後継の未命名型式や入佐Ⅰ式、古閑Ⅰ式の各新相段階に併行する。2014年に出原が提唱した上ノ村2式の一群は、概ね、このStage19新相段階に位置付けられよう(出原2014)。もっとも氏が指標とした上ノ村遺跡テラス2資料中には、より新相のStage20までが含まれている。つまり、同型式は一括資料を欠くと認識せざるを得ないだろう。第18図下段に掲載した資料群は、このうち型式学的視座から前後の混在土器を除外し、再整理を施したものである。

第18図19は口縁部外面に退化凹点と一条の横走沈線、さらに内面にも浅い沈線一条を配する深鉢片である。先の第18図5(写真15)からの退化型として理解できよう。東南九州域では別途中岳Ⅱ式からの系譜関係が未整理の現状にあるが、宮崎県日之影町布平遺跡SC12等で良好な類例が認められている(菅付編2003)。21も恐らくこれに準ずるであろう。20は口縁部外面に細線化した三条の沈線を弱々しく横走させる例で、前段の1・2よりは新しく、概ね滋賀里Ⅱ式の後半段階に属すだろう。前段で主勢を成した中岳Ⅱ式系列にも、ここで重要な変化が生じてくる。第18図23～30に示される通りで、それらの口縁における屈折立ち上がり部が萎縮し、外面に、のちの無刻目突帯へと通ずる段状の縁帯部を形成しはじめるからである。以下、左記タイプを中岳Ⅱ式に由来する「東南九州型段状(縁帯状)口縁」と仮称し、注視しておこう。段

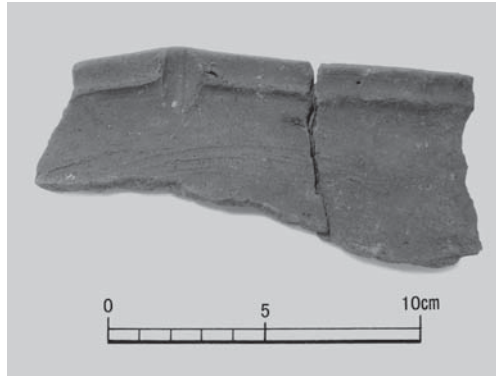


写真15 東南九州型段状口縁と滋賀里Ⅱ式・岩田第四類が折衷するStage19古相の深鉢
(土佐市上ノ村遺跡出土 / 高知県埋文蔵 / 筆者撮影)

状口縁の外面には、まだ前段の名残である横走沈線一～二条が残される例も存在するが（第18図19～21・23・30等）、何れも淡く、不鮮明である。そして主勢を成すのが、既に段以外が無文化した一群である。頸胴部界域の沈線も淡く不明瞭なのだが、まだ一～二条を加える個体が多い。つまり、未だ口・頸・胴三帯の各界域区分を意識した末期的段階、すなわち広域編年上で対比すれば、縄文晩期初頭の段階に収まる公算が高いと見做せるのである。このほか、上記一群のうち口縁端部内面に原則一条の細沈線のみを残す系列も存在する（第18図22～29）。その背景は先述した通りと予想されるが、後続する西南四国域X圏側のいわゆる中村I式（岡本1968、木村1987ほか）を再評価するうえでも、重要な指標となる。

素口縁を成す無文系深鉢は、前段以降、ようやく本格的な増加を開始するとみられる。当該期では屈曲形と砲弾形の二者が認められる。うち屈曲形は有文（段状口縁例を含む）の一群に準じた例が大半である（31・36等）。口縁に内文を加える素口縁の例は、本稿では Stage14以前の口胴縄文系からの系列を重視し「内文系」と区分し、無文系とは区別して扱ってきた。けれども、該期では既にそうした作り分け意識が曖昧化しており、中岳系や岩田第四類系の末裔とも親和しつつ、かろうじて存在が保たれている程度と想定されよう。後者の砲弾形については、口縁の直立するⅡ-③形（幸泉2017, p60参照）が主であり、やはり増加傾向にあらう（33～35）。また口縁端部を外方へと捻るⅡ-⑩形が新たに出現するのもこの時期である（36・37）。ただし器面調整については伝統的なナデ、または二枚貝条痕後ナデであり、成形法も内傾接合を維持している。

深鉢底部は径8～11cmほどの凹底、ないしは高台凹底で、後期後葉の製作伝統を引き継いでいる（第18図38～41）。

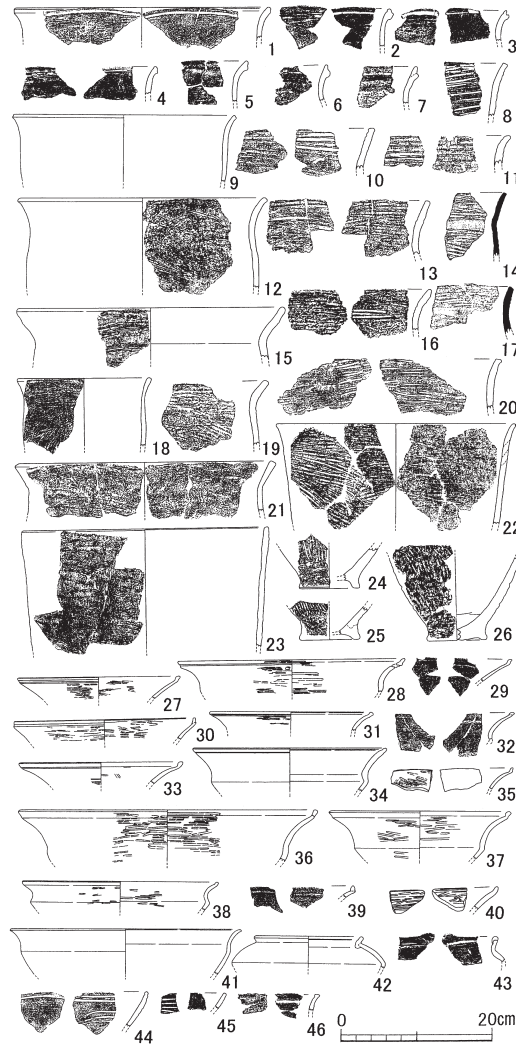
伴出の精製浅鉢には、前段を継承する二段屈曲浅鉢i-①形（幸泉2019b, p117参照；第18図42・45）、口縁逆「く」字状の末裔を成すボウル形（第18図43）、単純素口縁の椀形（第18図44）、ならびに断片的ではあるが、最初期の胴張浅鉢の存在が窺えるようになる（第18図46・47）。

(i2) 晩期前葉～中葉初期；南四国中央域区圏における Stage20～21前半の様相

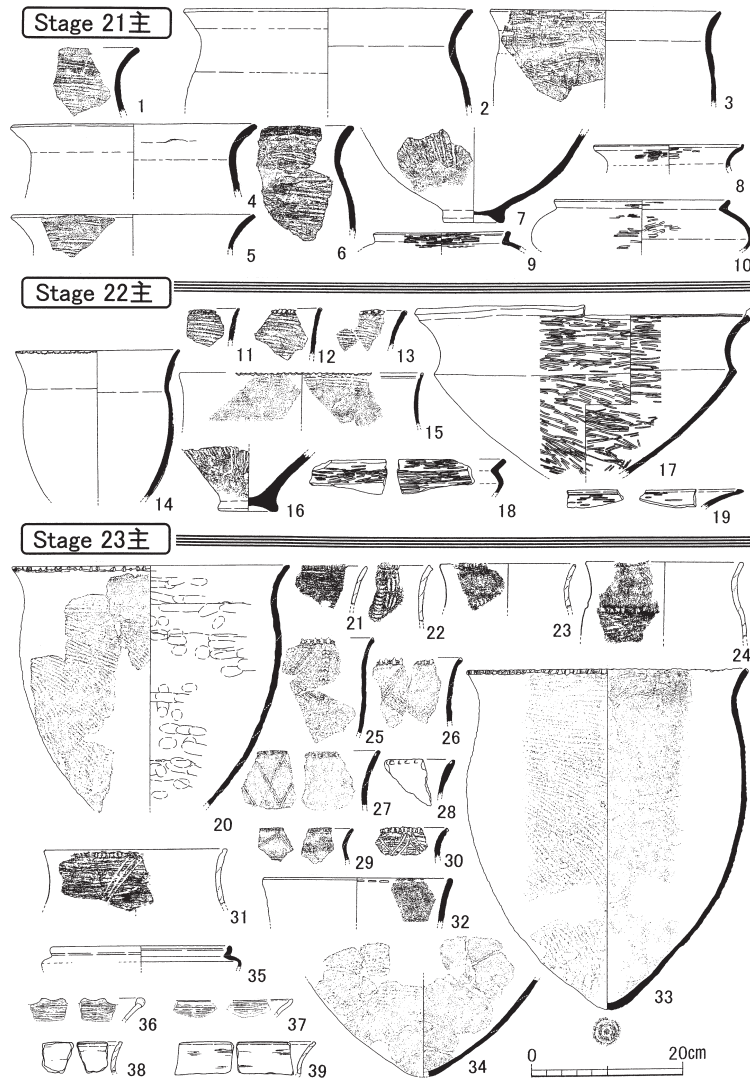
第19図は Stage20～21前半、いわゆる稲持4期、秋篠～篠原式古段階併行期の様相である。ここでも上ノ村遺跡の成果が代表的であるが、同じく土佐市内の居徳遺跡群4C区や、古くは八反坪遺跡（岡本1968）でも、型式学的に前後時期を除いた資料が抽出できる。

第19図1～7は口縁部外面に接して断面台形の突帯が一条貼り付けられた一群である。前段の Stage19新相で提起した口縁部の「東南九州型段状口縁」が、その視覚性

を維持しながら変異した一群であり、いわゆる「無刻目突帯文」の初源期と評すべき段階である。うち第19図1～4は端部内縁に細い一条の沈線が残るもので、同じく Stage19新相からの型式学的連続性を指摘できよう。器面は、原則ナデのみによって仕上げられる個体が多い。第19図8は、口頸部外面に粗い細沈線を多条に施す古閑Ⅱ式系列の一群である。関連して、口縁部外面に横位基調の明瞭な二枚貝条痕を加える第19図10・11・13も、古閑Ⅱ式新相の延長上で理解できるものであり、ともに Stage20に比定できよう。また無文系に属する屈曲形深鉢のうち、第19図14・15のように頸部に強いヨコナデを加える一群は、Stage20新相の広域編年に通底したタイプである。先の太平洋岸シリーズ第一弾で措定した東南四国側の「稲持5期」とも連絡する。一方、第19図16～21は器厚が6～7mm前後とまだ厚



第19図 南四国中央区圏の Stage20～21中相の様相
 (1～13・15・16・18～46土佐市上ノ村遺跡、
 14・17居徳遺跡4C区出土)



第20図 南四国中央域区画における Stage21~23の様相

(1・2・7・13土佐市居徳4C区SK2、3・4・6・8・11・12・16・19・30居徳4C区SR1、5居徳4C区X層、9・10居徳4C区SR2、14・17・18居徳4C区SK1、15・28・32・35土佐市北高田ⅣB区Ⅶ層、20・29・33・34居徳4D区Ⅳ層、21~24・31・38・39香美市新改小山田、25~27居徳5A区、36・37居徳2014試掘地点第8層出土)

は、Stage21以降のⅨ圏では原則認められなくなる。また内文を施す深鉢も Stage23で一端命脈を絶つと考えられる。第20図2・3に示される通り頸部にヨコナデの痕跡を残し、かつ、口縁部下端と頸胴部界域に痕跡的な稜線が残る深鉢が主体となる。広域編年の立場をとれば、当該シリーズ第一弾の東南四国篇における「稲持6期古相」、ないしは若干後続する段階との併行関係が想定できよう（幸泉2019a）。対する1・4～6は、そうした口・頸・胴三帯各界線の稜線が完全に失われ、頸部に極めて強い外反器形のみが残る段階である。未だ口唇部に刻目等を伴わない点から、型式学的には Stage21の「稲持6～7期」（幸泉2019a）との併行関係が想定できよう。これらの器面は、比較的粗いナデか、二枚貝条痕後ナデで仕上げられている。底部は前段と同様、径9cmほどの高台凹底が継承される（第20図7）。

伴出の精製浅鉢は口縁部を二段に屈曲、直立させる無文の第20図8や、胴部が球形に広く張る第20図9・10など、やはり Stage21前後の特徴を示している。

つづく第20図中段は、同じく、型式学的見地から Stage22主体と見做し得る一群を纏めたものである。良好な一括資料は皆無だが、土佐市居徳遺跡群4C区のSK-1のほか、同区のSR1、SK2のうち新相の一群を当てた。第20図11～15は、新たに深鉢口唇部に刻目刺突を伴うようになる。口頸部の彎曲が弱まるとともに、頸胴部界域が比較的強く屈折するようになる。うち15は内縁に細沈線一条の継承が確認できる。こうした流れもまた、前回の東南四国篇における「稲持9期」と通底しよう（幸泉2019a）。前段との型式学的連続性から、Stage22に措定できる。もともと南四国域では刻目刺突のバリエーションには乏しく、ヘラないしは細棒状工具による直刻のみを原則とする。器壁が薄手化するのもこの時期以降であるが、ケズリや擦過調整は器面上では顕在化せず、依然として、比較的粗めのナデ調整や二枚貝条痕で覆われる個体が殆どである。深鉢底部については前段と大差なく、底径8～9cmを主体とする高台凹底が主流である。当該期前後からは逆に、やや肉厚化した個体が目立ってくる可能性がある（第20図16）。

精製浅鉢についても実態不明瞭であるが、居徳遺跡群4C区における伴出状況から胴張浅鉢の亜種たる第20図18が、また長頸屈曲浅鉢では端部内縁が鋭い三角形を成す第20図17・19が該当しよう。

Stage23は、従来地元で倉岡I式として認識されてきた段階である。その後も、居徳遺跡群5A区古相や2014年の土佐市教育委員会による同遺跡群試掘地点第8層、北高田遺跡IVB区Ⅶ層、あるいは香美市新改小山田遺跡I区等で断片的資料が散見できる程度であり、特に資料には恵まれていない。深鉢では、頸胴部の屈曲が幾分弛緩した第20図20～33のように頸部が短く外反し、胴部は緩く球形に張るI-2-⑩形（幸泉2017, p60参照）が基本となる。刻目刺突の手法としては、半裁竹管やヘラ等に

よる押し刺突、単純刻等が認められるが、瀬戸内以北と比較するならば、そのバリエーションには乏しいといえるだろう（幸泉2019bc・2020b ほか）。

第20図33・34の事例から周縁他地域と同様、該期から Stage24にかけて尖底、あるいは丸底への一時的な製作技法の、さらに付随して、日常的な調理手法の大転換が指摘できる。既に筆者が指摘する通りで、これらは山陰中部に端を発し、環瀬戸内海周辺へと拡散した新技法であるが（幸泉2018a・2020ab ほか）、尖底主体という形態的特徴を鑑みるならば、瀬戸内方面に加え、東四国を介した関西方面からの影響も考慮すべきであろう。

第20図22・24～27・29～31は谷尻系深鉢である。うち22は刻目と短沈線で構成される比較的古相の事例である。ただし、刻目列に縦位の短沈線を加えるパターンは、分布の主体を成す瀬戸内～山陰中部域では認め難い（幸泉2019bc・2020ab）。従って、南四国域で変異した在地意匠の一つと理解しておこう。時期的にも Stage23前半を大きく遡り得ないだろう。また頸胴部界域に施される γ -⑨型の押し刺突文（分類基準については幸泉2019b, p117参照、以下同様）のみを施した24や、頸部に複数条で斜行の格子目 D-③ b 型意匠と C-⑨ a 型の「コ」字状押し刺突を組み合わせた手法も、厳密には瀬戸内側では存在しない変異型であり、その個別表現からは、Stage23新相への帰属が最も妥当と判断される。このほか、口縁端部内縁に連続押し刺突 β -⑧ R 型を施す27・28（写真16）などは、その系譜上、明らかに西部瀬戸内を經由しており、既に筆者が指摘する通り、こうした背景として、新たに西四国側で北と南とを結ぶ交流ルートが形成されるようになったと捉えるべきであろう（幸泉2020b ほか）。

最後に伴出の精製浅鉢であるが、第20図35に示す胴張浅鉢は、胴部上半に強い屈曲を設けて上下萎縮化を促進させている。また第20図36～39に示される長頸浅鉢についても端部内縁における蒲鉾状肥厚の低平化、ないしは凹線による玉縁肥厚の省略化を認めることができる。何れも Stage23後半を中心とした時期への帰属を想定できであろう。

(14) 晩期前葉～中葉；西南四国域 X 圏における Stage19～23の様相

ここで一端、晩期前半の X 圏の様相に戻ろう。以下では学史的に名高い四万十市の中村貝塚第2貝層と、有岡ツグロ橋下遺跡第4層資料（岡本1968、木村1987）を中心に、西南四国域の Stage19～23について論述を加える（第21図）。

最初に第21図の右上枠に示した一群であるが、これらは第21図2（岡本1968, p65）を除き、全て四万十市教育委員会が保管する中村貝塚出土の未公開土器群である。かつて岡本健児や木村剛朗等が公表し、注視されるようになった1965年における旧中村市教育委員会の試掘資料群、すなわち中村 I・II 式の標式土器群（岡本1968、木村

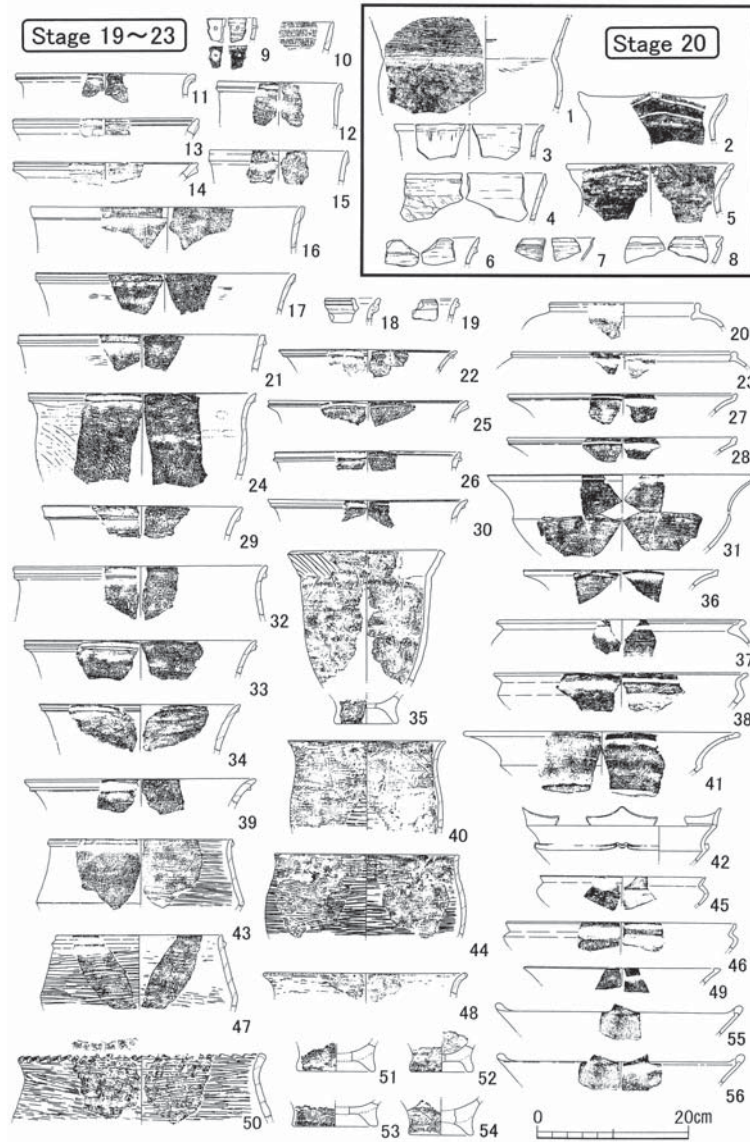


写真17 無刻目突帯文成立期の土器
(中村貝塚出土 / 四万十市蔵 / 筆者撮影)

1987(ほか)とは、異なる資料である(以下、「中村貝塚2020新資料」と仮称)¹⁰⁾。出土状況の詳細が不明であることから、ここでも一括性の是非等は議論の対象外とせざるを得ないが、以下述べるように、周知の標式資料群とは明らかに主体時期が異なる。

第一に、中村I式で普遍的とされる「無刻目突帯文」意匠を表現した土器が存在しない(写真17)。代わりに、先のⅨ圏でみたStage20前後の「東

南九州型段状口縁」を採用している。異なるのは、内縁の沈線を欠く点であろう。かつて、木村はこうした内文の有無を両者の年代差として理解した(木村1987, p370-371・443-445ほか)。なるほど、内文の命脈はⅨ圏においてはStage20までで一端途絶えてしまう。先述の通りであり、Ⅸ圏における内文の起源は凹線文ホライズン以前にまで遡ろう。一方で、西方のⅩ圏では四万十市大宮・宮崎資料群以降の脈絡が不明であり、後期末～晩期前葉まで内文を有さなかった可能性もたれる。2020新資料群のみならず、後述する稀少な中村貝塚1965資料群中にみえるStage19段階の第21図11等でも、内文は備えていない。仔細は今後の課題であるが、併行期の九州側では、豊後水道に面した東南部域を除いて内文は存続しない。つまり、これら内文の隆盛の一端が瀬戸内側にあり、相対的に交流の深いⅨ圏で維持されていた可能性は、十分に考え得るところであろう。では、いわゆる中村I式の無刻目突帯文に伴う一～二条の内沈線文は新旧判断の目安となり得るだろうか。後述するように、刻目突帯文期においては別途、この内文が瀬戸内周辺で復調する傾向にあり、Stage25の口酒井式併行期まで継承されている点を忘れてはならない。従って、いわゆる中村I式における内文の全てを、晩期前葉以前と位置付けるのは、尚早といわざるを得ないであろう(第22図21や四万十市下ノ加江遺跡例; 木村1995, p914等)。さらに、刻目突帯文期における内沈線については別途、浅鉢との親和性のもと成立するという宮地聡一郎の主張も看過はできない(宮地2008)。何れにせよ、単に内沈線の有無のみを新旧の指標に据えることは、至難といわざるを得ないのである。現状で、Ⅹ圏における後期末前後の良好な事例を欠くことから、厳密な議論が成し得ないものの、中村I式における内文は、



第21図 西南四国域X圏における Stage19~23の様相

(1・3~8 四万十市中村貝塚2020新資料、9ヲキシヨウジ立会地点、2・10~14・17~19・21・22・24~28・30~42・44・48・49・51~54中村貝塚1965第2貝層、15・16・20・23・29・43・45~47・50・55・56四万十市ツグロ橋下遺跡第4~3層出土)

後期後葉のX圏における在地伝統をそのまま継承した姿でないことだけは、確かなようである。何れにしても、現状の南四国域のみでは資料不足であり、別途、周辺諸地方の様相を遍く比較検討したうえで、結論を導いていく必要があるだろう。

第二点目として、九州系土器の流入問題が挙げられる。第21図右上枠についても、伴出ないし近接の可能性が高い九州系土器の存在が認められる（第21図1）。この新資料は口縁端部を欠くものの、口辺部が長く直線的に外傾し、頸胴部に界線として横走する「レ」字状凹線を、また胴部は球状に強く張る。そしてその口辺部外面には、浅く細い横走沈線が四条以上、重畳するのである。南九州における Stage20中相、入佐Ⅱ式中段階と酷似した土器といえるだろう。

第21図2は口縁波頂部を軸に二条の沈線がめぐる深鉢である。広義の滋賀里Ⅱ式に準ずるのだが、口頸間の屈曲界域が既に失われ、下位二条目の沈線が頸部への進出を窺わせる点、さらには長崎県肥賀太郎遺跡例（中尾編2006）等、西北部～中部九州域で新たに展開しはじめる口辺部の連弧状意匠との関連が、無視できない。厳密には類例を欠くが、口縁部文様の頸部への進出や、口・頸・胴各界域の不鮮明化を素直に評価するならば、同じく Stage20段階への帰属を想定すべきだろう。また第21図5も、第21図2や3・4の延長上にあると理解してよい。なお同地点出土の精製浅鉢は、第21図7・8とも口縁部外面に淡く痕跡的な横走沈線一条が描かれており、上記編年観を支持している。

第21図9は、四万十市ヲキシウジ遺跡の2009年立会試掘地点 Tr-A で出土した、南四国エリアでは稀有な孔列系突瘤文類型の砲弾形深鉢（甕）片である（後篇写真23参照）。口唇部に鋭い面取り調整を加え、口縁部の内面側より深い円形刺突を連続施文することで、正円の明瞭な突瘤文を表現している。内孔直径約4mm、深さ4.5mm前後の正円形で、中心点間の間隔は11～12mmを測る。押引手法を採らない点でも、型式学的に最古相を示している。器面は外面が丁寧なナデ、内面には細密条痕が残る。胎土中には直径2mm以下の石英、長石、赤色斑粒の混和に加えて、砂岩系の河原円礫を極少量含んでおり、器厚は4.5～5mmと薄手、焼成は、該期としては極めて堅致である。以上から、朝鮮半島を淵源とした外来土器であることは疑いないだろう。ただ不思議なことに、四国地方はもとより、隣接する九州地方でも、今のところ全く類例を見出せない。同タイプの突瘤文土器が分布するのは、わが国では日本海側の山陰中部域のみである。既に片岡宏二、千羨幸等の尽力により、山陰側の実態についてはある程度明らかにされている（片岡1993ほか、千2005・2007・2008ほか）。さらに近年の筆者による最新成果から、西中国山地からの影響が大きいと想定される西北四国域では、退化型の出雲H群Ⅱ新～Ⅳ類しか確認できないことも判明している（幸泉2019c・2020bほか）。時期は、Stage22である。当該ヲキシウジ遺跡の例は、これら

西北四国よりもさらに南下した西南四国の山間部に位置している。にもかかわらず、故地のプロトタイプに近い四国地方最古級を示すという点で、特筆に値するのである¹¹⁾。

第21図10は古閑Ⅱ式（または入佐Ⅱ式）併行期を示す深鉢小片である。他にもう数片、同型式の土器が出土している。何れも外傾する口頸部に広く四～五条前後の横走細沈線が重畳する点で共通する。器面をミガキないし丁寧なナデ調整で仕上げる精製の手法を採る点でも異色であり、東南九州における Stage20後半と連絡しよう。

第21図の枠外は、1965年5月の中村貝塚試掘による中村Ⅰ式標式資料群と、1979年までに有岡ツグロ遺跡で出土した古相の一群をベースに、近年新たに報告された四万十市ヲキシヨウジ遺跡Ⅸ～Ⅹ層出土土器群を加えたものである（木村1987ほか）。先述の通り、未だ一括性を欠くため、Stage19～23と表現し、敢えて細別は試みない。中村Ⅰ式標式土器群についても、型式学および広域編年の視座から今日、一時期を画する一括資料群とは理解できないであろう。ここでは刻目突帯文出現以前の土器群と広く捉えたいので、以下論述を進めたい。

第21図11～14・17～19・21・22・24～26・29・30・32～34・39・43・47は、古くから地元で注視されてきた「無刻目突帯文」の一群である。先に紹介した中村貝塚2020新資料を介することで、これら段状口縁の縁帯部から、無刻目突帯文が第21図3・15・16→6・11→14→17～19・21・22・24・25の順に生ずることが、型式学レベルでより鮮明に把握できる（後篇第26図参照）。

一方、第21図43・47は頸胴部が算盤胴形に屈曲し、口縁が強く内傾する器形が特徴的な個体群である（以下、内折深鉢）。突帯は細く、鋭い断面三角形形状へと変容している。かつて木村も中村貝塚とツグロ橋下資料を比較するなかで、この内折深鉢の組成差に言及しており、卓見といえるだろう。すなわち前者の中村貝塚が7.6%と客体的であったのに対し、新資料群の比率が高い後者のツグロ橋下では31.0%と相当数に上るとしている。氏は、後続の中村Ⅱ式にみる九州型二条突帯深鉢との器形上の連続性をも視野に、当時この内傾深鉢群を中村Ⅰ式の新相と解釈したのである（木村1987, p443-446）。因みに、出原は上記43・47のような内傾深鉢を中村Ⅱ式の範疇で捉え直すべ



写真18 内文を有す無刻目突帯文深鉢
（中村貝塚出土 / 高知県立歴史民俗資料館蔵 / 筆者撮影）

きと主張している（出原1994, p232ほか）。何れにせよ、今日大枠では南九州の干河原式（東2009）に類似する土器群たることが自明であることから、その帰属時期については概ね、Stage23後半と捉えてよいだろう。ただし、横位の二枚貝条痕を明瞭に残す個体が多い点では、地域色を示している。

第21図35・40・44・48・50は無文系深鉢である。先の無刻目突帯文を狭義素文の一群と解するならば、当該X圏における無文系の割合は、未だ少ないということになる。口唇部にD字の押引刻を付す短頸屈曲口縁の第21図50や、淡い直刻を伴う48がStage22～23を示すのに対し、同じく短頸でも刻目を伴わない40・44は、広域編年の立場からすれば古相であり、Stage21頃に属する可能性もある。またこうした特徴は、東四国や瀬戸内側に準じている可能性が高く、その影響が予想されるのだが、組成比上の割合が極めて低い点で大きく異なるのである。

上記X圏の深鉢群に伴う底部形態であるが、Stage22までは新たに長脚化した高台底ないしは高台凹底が主勢を成すようである（第21図51～53）。Stage23については特に一括事例に恵まれないため不明瞭さを増すが、IX圏の南四国中央域のような尖底、丸底をほとんど見出せないことから、こうした在地系の高台底や高台凹底が厚底化しつつ、そのまま存続する可能性が高いと判断しておきたい（第21図54など）。

以上の深鉢（甕）群に伴出する精製浅鉢は多種多様である。しかしながら、広域編年とを対比させるならば、これら浅鉢群が一時期のセット関係を示すのではなく、複数時期の混淆を示唆することは明白であろう（第21図枠外右列）。ここでは、型式指標となる胴張浅鉢と長頸屈曲浅鉢について補足しておく。前者の胴張浅鉢では、胴部が球形に強く張る20・23・37が、また長頸屈曲浅鉢では口縁部が二段に立ち上がり、その外面に浅い一条の沈線が残る例（第21図27・28）と、無文となる例（31・36）が古相である。各々 Stage19～21までに取まろう。対して、胴部がやや萎縮化した胴張浅鉢38・45・46、長頸屈曲浅鉢のうち、口縁端部内縁が三角～蒲鉾状を呈する個体（第21図41・42・49・55・56）は新相であり、Stage22～23相当と、各々新しく見積もれよう。以上は、筆者の想定する無刻目突帯文深鉢の存続期間を客観的に支持するものでもある。

(15) 晩期後葉（弥生早期併行）；Stage24～27の様相

第22図は刻目突帯文期にあたる Stage24～27、いわゆる突帯文成立期～夜白Ⅱ a 式併行期までの様相を纏めたものである。学史的にはIX圏の倉岡Ⅱ式、X圏の中村Ⅱ式～入田 B 式の断片的、ないしは一括性を欠く資料群を頼りに、解釈だけが先行してきた感が否めない。その主な理由としてはやはり、長らく、資料蓄積が不十分なまま推移してきたことが挙げられよう。1990年代以降、前後時期が混在するもの高知市

柳田遺跡ⅡJ区第Ⅰ層（森田ほか編1994）や南国市栄エ田遺跡（松村編1995）、船戸遺跡Ⅰ区新相（松田編1996）、四万十市（旧西土佐村）大宮・宮崎遺跡A-4区新相（木村編1999）、土佐市北高田遺跡ⅣB区Ⅲ～Ⅴ層（出原編2000a）、香美市新改小山田遺跡Ⅰ区の新相資料群（中山編2002）、四万十市ヲキシヨウジ遺跡の新相資料群（川村編2011）と、ようやく新資料

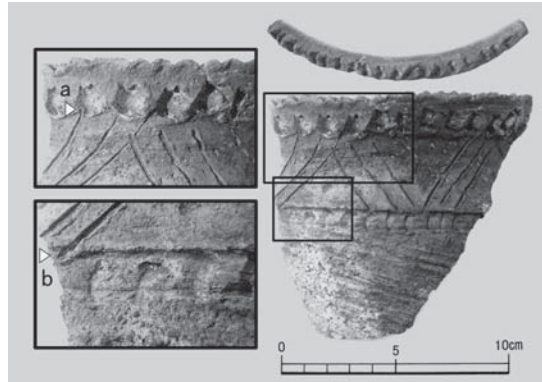
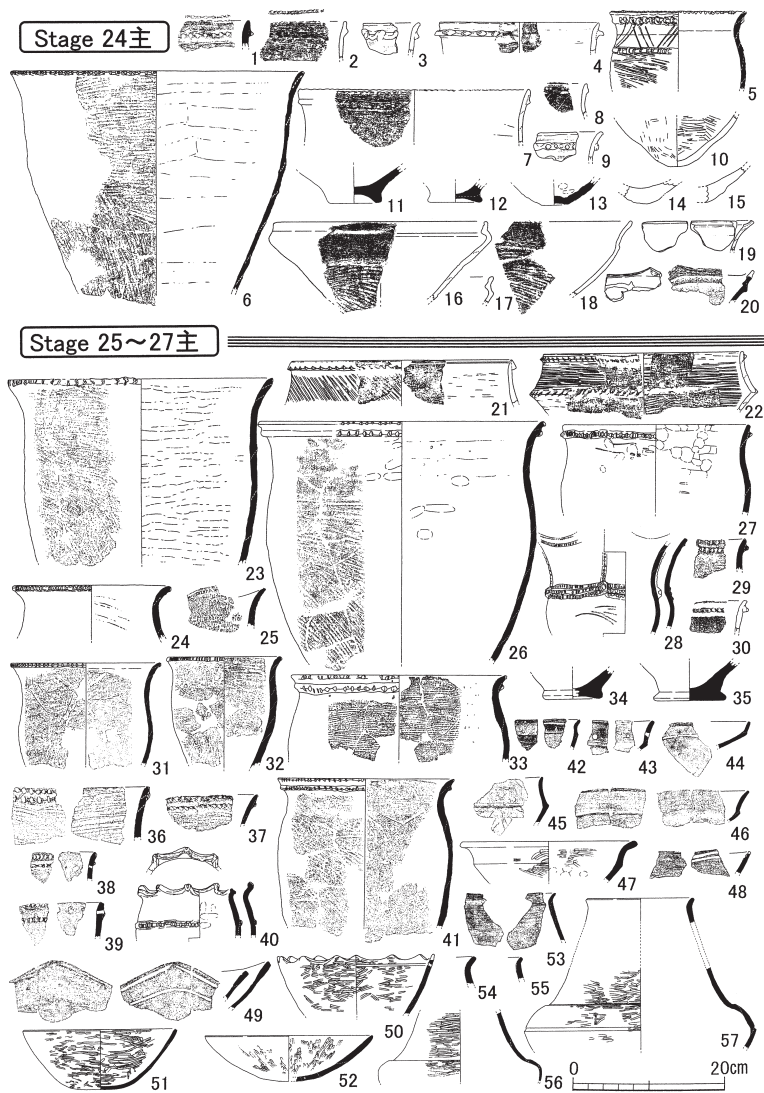


写真19 南四国における突帯文成立期土器
（土佐市居徳遺跡群4C区SR-1出土 / 高知県蔵 / 筆者撮影）

群が相次いで得られるようになった。さらに2000年代に至り、土佐市居徳遺跡群の3B区、同5A区古相、4C区SR-1第1層の主要資料群、同4D区（佐竹・曾我ほか編2003、曾我編2004b）等で、前後の膨大な資料群が収集されるに至っている。

第22図上段は Stage24前後、刻目突帯文導入初期の神谷川～前池式、滋賀里Ⅳ式併行期頃を中心とした時期の土器群である。一括事例を欠くものの、柳田遺跡ⅡJ区Ⅰ層の古相と、新改小山田遺跡Ⅰ区の新相資料群が比較的纏まっている。第22図5（写真19）は居徳遺跡4C区SR-1出土である。近年、犬飼徹夫が学史上の「倉岡Ⅱ式」相当として再評価した土器であるが（犬飼2015a, p32-33）、内容的には、刻目突帯文導入初期の様相を示唆するといえるだろう。口縁端部より約1.5cm下がった位置に断面三角形の幅広い突帯を貼付け、その突帯上、および口唇部に半截竹管状工具逆手による「コ」字形の連続押し刺突を、また胴部最大径位置に施される頸胴界域の刺突列も、同種の「コ」字状逆手技法による波動文（幸泉2019b・2020bほか）が施文されている。さらに頸部には、刻目突帯を表現した後に裁頭山形文が、三条単位からなる幅1mmの細沈線によって描かれている。胴部には、前段を継承した二枚貝による粗い斜位の条痕も明瞭に残されており、ケズリ調整は導入されていない。以上の特徴を具備した深鉢形土器は近年、西部瀬戸内側でも注目されはじめている。筆者自身が広島県福山市神谷川遺跡出土資料等をもとに提唱した「神谷川式」がその端緒である（幸泉2020b, p91-92）。この神谷川式は、実は西北四国域でも愛媛県松山市の船ヶ谷遺跡や大淵遺跡資料（栗田編2000ほか）の一部でも複数の類例が認められている。当該第22図5（写真19）はつまり、南四国域でも刻目突帯文導入の最初期において、西部瀬戸内を介し、いち早くその影響が享受されはじめていたことを示唆する土器なのであ



第22図 南四国域における Stage24~27の様相 (抄)

(1・11~13高知市柳田ⅡJ区Ⅰ層、2・7・8・10・14~19香美市新改小山田、3・9ヲキシヨウジⅨ層、4四万十市大宮・宮崎A-4区、5・6・24土佐市居徳4C区SR1、20居徳3B区、21ツグロ橋下3層、22中村貝塚1965第1貝層、23・27・36居徳4D区Ⅳ層、25・26・28・29・32・38~50居徳1C区ⅣB層、31・33・37・51~57居徳1C区ⅣD層、30ヲキシヨウジⅩ層、34・35居徳遺跡4C区Ⅸ層出土)

る。

第22図上段の1～4・7～9は、上記5よりも型式学的に後続するとみられる一群である。同じく口縁端部より1.5cm前後下がった位置に断面三角形を成す明瞭な突帯を貼付ける例や、1・2・7のように口唇に刻目を伴う例、また口唇部刻目を有さないものの、Stage24段階に特徴的な「ユビ刻」表現が採られる3・4、またこれに準じた9の存在のほか、頸部に三条以上を単位とした裁頭山形文風の意匠を伴う8などが該当しよう。これらは、Stage24でも中～新相段階への帰属が想定できる。

以上のStage24段階では、第22図6に示されるような口唇を刻む無文系K類型の粗製深鉢が伴う。前段のStage23段階（第20図20・33等）から継承される器種だが、両者を比較するならば、胴部の膨らみが収束して緩屈曲化し、口縁部が外方へと強く外反する頸胴緩屈曲I-2-⑨・⑩形（幸泉2017, p60参照）へと変化している点で識別が可能であろう。

成形は、原則全て内傾接合である。深鉢底部については、X圏では在地由来の高台凹底が主体、IX圏では、これに外来の尖底、丸底が加わると予想される。やはり組成率等、詳細は不明なままである（第22図10～15）。

伴出の精製浅鉢もまた、厳格な意味で共伴関係の検証を欠くが、型式学的には第22図16～20が概ね該当しよう。16・17は胴張浅鉢である。胴上半部の萎縮や、口縁部内縁における肥厚部の退化が著しい。18～20は屈曲浅鉢である。うち20は関西地方の鬼塚タイプに近い長頸鍵形口縁（泉1990ほか）を呈しており、Stage24でも新相段階に措定できよう。

第22図下段はStage25～27、いわゆる夜白I式～夜白II a式、口酒井～船橋式併行期の様相である。地元で中村II式～入田B式として認識されてきた段階でもある（岡本1961・1983、木村1987）。未だ型式細分の進んでいないのが現状であるが、その原因としては、やはり厳密な意味での一括事例に乏しいことに尽きるであろう。

第22図21・22・26・27～30・33・36・39・41は刻目突帯文系深鉢である。うち21・22は四万十市中村貝塚出土の九州型で、広義の夜白I～II a式に対比できよう。強い内傾屈曲と二条突帯が特徴的であり、これまでは、出原により西北部九州とのダイレクトな交流が想定されてきた（出原1994ほか）。しかしながらより厳密に観察するならば、幅12～14mmにまで達する太く明瞭な斜行短沈線などは、西北～北部九州では原則認められない施文手法であることに気付くだろう。近年、東南九州側でも該期の類例が増加してきたことから、その故地や伝播経路については何れ、広域的視座から再考を果たしたいと考えている。

器面は明瞭な二枚貝条痕、成形は内傾接合である。なお二条突帯九州型はのち、入田B式（岡本1961ほか）とされてきた弛緩した二条突帯の一群へと変容するが、X



写真20 谷尻系意匠を継承する未解明土器
(土佐市居徳遺跡1C区出土/高知県蔵/筆者撮影)

圈では前後時期の類例に恵まれないため、この点については詳述を控えておく。

対するⅨ圈では原則、二条突帯は認められない。以降は、隣接する東南四国や西北四国側と一部連動しながら変遷していく。26・27・33は突帯が口縁端部から約1.0~1.5cm下がった位置に比較的明瞭に貼付けられており、かつ26・33は粗製化しつつも二枚貝条痕が

加えられ続けることから、相対的に古相と判断すべきであろう。なお26・33の器面には僅かにアバタ痕が看取できる。いずれも口唇上の刻目が端部外縁へと移行する点で新しい。前後型式からみて、概ね Stage25~26への帰属が予想されよう。以降、こうした外縁端部の刻目は、弥生前期まで陸続と継承されていくのだが、刻目突帯の低平萎縮化と端部への接近により、36・37・41のようなタイプを生成している。うち上半の器形が復元できる41では、胴部以下の直線的な下降を、新たな特徴として捉え得るだろう。これらは二枚貝条痕を残す点と、未だ刻目突帯が独立を保つ点で、概ね Stage26~27段階に帰属するとみておきたい。今後良好な一括資料の蓄積を待って、より正確な位置付けを模索すべきであろう。

第22図25(写真20)と28は、谷尻系の意匠を一部継承する、南四国で在地化した土器である。かつて曾我貴行がF2類とした一群であるが(曾我2004a, p226-227)、未だ学界では実態が明らかにされていない。口縁部に付された刻目突帯文は、何れも独立を保つものの萎縮化が顕著であり、古く見積もっても Stage25を遡ることはないだろう。このほか40についても曾我がF1類として注意を促した、大洞A式の口縁部要素を折衷する稀有な壺形土器の事例である。十単位程度の波頂部を備え、胴部には刻目突帯一条を伴う。同じく、Stage26~27段階への帰属が可能性として想起されよう。

伴出の無文系K類型深鉢(甕)についても、さらなる型式変化が窺える。大勢としては胴部の張りが失われ、口縁部の外反が強まることで類如意形化、すなわち西北部九州域の板付(弥生)祖型甕(山崎1980、家根1987、藤尾1987・1999ほか)とは異なった、南四国在地の類如意形口縁の甕(深鉢)へと変遷する点が挙げられよう(第22図23→31・32)¹²⁾。先述のように、口縁の刻目も Stage24までの上縁から、第22図

23・31・32のように端部外縁へと移行してくる。うち23は胴部の粗い二枚貝条痕のみならず、口唇の刻目原体にも二枚貝が用いられており、31・32よりも古い特徴を備えている（後篇写真24参照）。こうした施文手法については、先の26・33にみる微アバタ痕の存在とともに周防灘西岸域を故地とする可能性が強く、注目に値しよう。何故なら、Stage25以降に豊後水道を介した周防灘側からの影響が関与することへの、客観的証左となり得るからである。以上のように板付祖型甕とは異なる系譜を具備しつつ、のち南四国域周辺において弥生前期の如意形口縁甕生成の一因を成した可能性が想起される上記一連の土器群について、本シリーズでは以下「居徳型祖型甕」と仮称し、特に注意を喚起しておきたい。

伴出の浅鉢については退化、減少傾向が想定される。現状では各期の詳しいセット関係を示せないため、広域編年との対比から、Stage25以降における逆「く」字口縁浅鉢の出現（42～47）や、末期型の方形波状浅鉢の存在（49）、あるいはStage26～28まで下るとみられる多波状ボウル形（50）、素口縁の単純ボウル（椀、マリ）形、中華ナベ形（51・52）への変異といった、大勢の流れを想定するに留めたい。

このほか、居徳遺跡ではStage25～26頃から山ノ寺式・夜白式由来の中～大形壺が伴いはじめる。第22図53～55・57に示される通りであるが、これらの口縁端部は稜を成し、屈折するタイプが大半を占める。既に田崎博之が、北部九州にはない瀬戸内周辺の変異型であると指摘し（田崎2000）、のち小南裕一も、これら瀬戸内型の変異壺に内傾接合が多い点を掲げるなど（小南2012, p70）、伝播過程における変容が想定されてきた。南四国域におけるこうした壺類も、周防灘を含めた瀬戸内側の動向と概ね連動している。田崎が述べるように、東方伝播に伴った一定の時間的ズレを勘案するならば、これらもまたStage26～28、夜白Ⅱ a～Ⅱ b 式併行期を遡ることはないとするのが妥当であろう。

（後篇につづく）

註釈

- 5) うち横走する波状沈線文が、併行期以前の関西～瀬戸内地方で広く展開した結節縄文に由来し、一条の沈線文により簡略化させた姿であることはほぼ自明である。
- 6) 凹線文の成立をめぐっては、岡田憲一が広口深鉢における頸胴部界域の区分手法として元住吉山Ⅰ式の間に段から凹線へと変化し、これを契機として、従来の沈線意匠が凹線へと置換したと推察しており（岡田・深井1998, p148-150ほか）、のち宮地聡一郎もこの見解を認めている（宮地2013, p95）。ただし岡田自身は未だ慎重であり、「元住吉山Ⅰ式からの自生説」は「十分なもの」ではなく、東海地方等、「多元発生の可能性」にも後年、言及している（岡田2008, p656）。
- 7) なお2002年、木村は筆者の見解とは逆に、この船戸資料の一群を上記西平（伊吹町）式併行の直前と仮定し、「船戸式」を提唱している（木村2002, p35-36）。その際氏は“試論”としつつも波頂部の刻目や口

縁部の楕円形区画文（第12図1）、あるいは口胴部文様帯における小振幅の波状文（入組文）や沈線末端を鉤状に屈曲させたり短沈線で区切る手法を、Stage12新相(3)段階との絡みから伊吹町式よりも古相と位置付け、分離させたのである。しかしながら、そもそもそうした主張は船戸資料群の一括性が担保されてはじめて議論できる論法であって、複数時期が混在する包含層資料である以上、まずは型式学的レベルから疑って掛からざるを得ないだろう。故に本稿では、既に船戸資料群のうち Stage13古相の一群を型式学的見地から分離させている。

- 8) こうした、西南四国圏における局所的ともいえる全縄文深鉢の存在は、凹線文ホライズン成立の背景に、東方からの影響が関与することを暗示するものとして、今後とも注視していく必要がある。
- 9) このことから理解できる通り、凹線文成立に到る精緻な比較研究は、今後とも欠かせないであろう（幸泉・宇藤2018）。
- 10) 2019年8月、四万十市教育委員会のご厚意により、当該未公開資料群の図示公表をご快諾頂いている。残念ながら出土状況等に関する詳しい情報は継承されていない。
- 11) 以上の謎を解くためには2009年立会試掘地点周辺の再発掘が切望されるころではあろう。当該孔列系土器片の伝播経路に対する追跡調査は現状の類例比較のみでは困難であることから、今後に託された継続課題であることを指摘しておきたい。
- 12) 藤尾慎一郎の定義によれば、「砲弾形の器形で、直口縁の口唇部に突帯を貼り付けず直接、刻目を施文する甕」で、成形は「外傾接合」、器面調整に「刷毛目」を伴い、色調は「明るく発色」、「精良な粘土」など、伴出の刻目突帯土器群とは雰囲気を異にし、朝鮮半島の「無文土器」に系譜が求められる可能性が指摘できる土器ということになる（藤尾1999, p59ほか）。

参考文献

次回シリーズ第二弾の後篇にて、一括掲載する予定である。

挿図表典拠

第12図：1～3・10・21・22松田編1996、4・6・7・9・11・13～15・23、第13図：15・16木村編1999、第12図8木村1995、12・16～20・24山本・廣田編1986、第13図：1～14松田編1996、第13図：15～45は筆者原図（ただし15・16・30～32・36・43・45の拓本については松田編1996より引用）、第14図：松田編1996と筆者再実測原図をもとに筆者作成、第15図：筆者再実測原図、第16図：森田ほか編1994より大幅再編、第17図：1～3・7～16木村編1999、4松村編1995、17・20・25・27・28・31筆者原図、5・6・18・19・21～24・26・29・30山本編1984、第18図：1～23・25・27～47出原編2011、24・26佐竹・曾我ほか編2003、第19図：1～13・15・16・18～46出原編2011、14・17佐竹・曾我ほか編2003、第20図：1・2・7・13佐竹・曾我ほか編2003、3・4～6・8～11・12・14・16・17～19・30佐竹・曾我ほか編2003、15・28・32・35出原編2000a、20・29・33・34曾我編2004b、21～24・31・38・39中山編2002、25～27佐竹・曾我ほか編2003、36・37池田編2015、第21図：1・3～8筆者原図、9川村編2011、2・10～14・17～19・21・22・24～28・30～42・44・48・49・51～54木村1987、15・16・20・23・29・43・45～47・50・55・56木村1987、第22図：1・11～13森田ほか編1994、2・7・8・10・14～19中山編2002、3・9川村編2011、4木村編1999、5・6・24佐竹・曾我ほか編2003、20佐竹・曾我ほか編2003、21・22木村1987、23・27・36曾我編2004b、25・26・28・29・31～33・37・51～57曾我ほか編2001、30川村編2011、34・35佐竹・曾我ほか編2003より、一部再編。写真11～20：筆者撮影・レイアウト（各許可申請済）。